FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2013.11.15 No.47

新春特別企画「干支の午」展より

乗馬の風習は古墳時代から　椀貸山２号墳出土の馬具

「人と馬の関係とは何でしょう」と、質問されたら、多くの人が最初に頭に浮かべるのが、乗馬だと思います。

例えば、テレビをつけると競馬中継や時代劇。それに、最近はあまり放映されませんが荒野を舞台にした西部劇など、乗馬に関係する番組はたくさんありますし、オリンピックの種目にも馬術競技があります。

馬はペットにするにはあまりに大きいので、今の私たちの生活からは、かなり遠い存在になってしまいました。テレビを見ず、競馬を知らない筆者は、年に何回か口にする馬刺しによってのみ、かろうじて馬を身近に感じているほどです。

日本の縄文時代や弥生時代に馬が居たのか？という問題については、過去に多くの議論があったにも関わらず明確な結論には至っていませんが、考古学と自然科学の両面からの検討の結果から、恐らく居なかったものと考えられます。

日本の弥生時代のことを記した『魏志倭人伝』に「馬はいない」と書かれていることは、事実だったのではないでしょうか。

最初に、馬利用の代表として乗馬をあげましたが、乗馬という風習が日本国内に広がったのは古墳時代からと考えてまず間違いありません。なぜなら、馬具が古墳の副葬品として多く出土しており、しかも、それは特定の大型古墳のみではなく、比較的小型の古墳からも出土しているからです。

馬に乗るということは、馬上から馬を操らなければならないということになります。そのための馬具が、馬の口に銜（くわ）えさせる轡（くつわ）で、馬具の中で最も重要なものです。ですから、最初の馬具は轡でした。４世紀後半～５世紀初頭の北九州では、最初の馬具として轡のみを副葬した墳墓が幾つか確認されています。

そして、轡に一歩遅れて、鐙（あぶみ）や鞍（くら）など馬上で身体を安定させるための馬具が出現します。その早い例として滋賀県新開１号墳や大阪府七観古墳出土品などが５世紀前半頃のものとして、古くから知られています。

福井県立歴史博物館には、福井県おける乗馬の風習を考えるに際して、極めて重要な資料が収蔵されています。それが、本稿のサブタイトルにもある椀貸山（わんかしやま）２号墳出土の馬具です。

椀貸山２号墳は、坂井市丸岡町坪江にかつて存在した全長26ｍ、後円部高３ｍを測る前方後円墳です。残念なことに工場造成のため未調査のまま破壊、削平されてしまいましたが、幸いにも破壊時に露出した遺物（須恵器、馬具、鉄刀）が採集されたため、それらの遺物から椀貸山２号墳が６世紀前葉の古墳であることがわかります。

本墳出土遺物の中で、特に重要なものとして木芯鉄板張輪鐙があります（写真１）。

写真１

木芯鉄板張輪鐙というのは、細長い木の板を曲げて鐙の形を作り、それに鉄板を被せたものです。

写真2

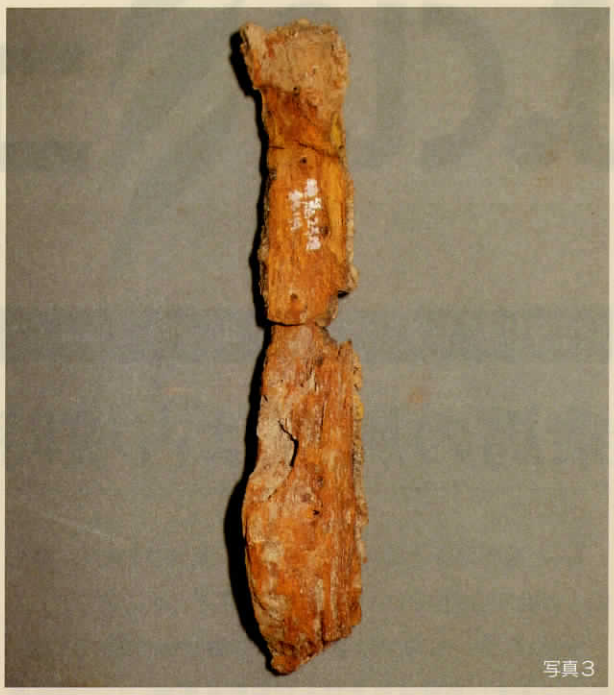


写真3

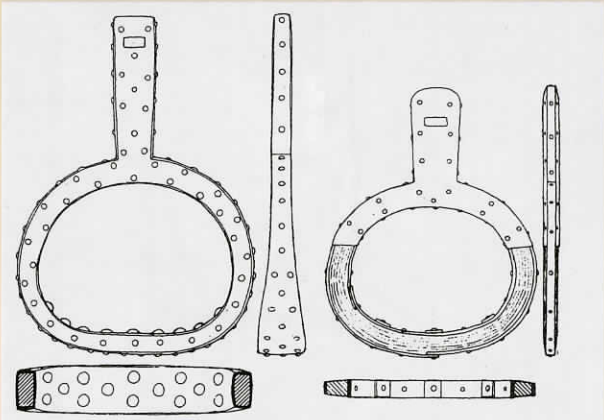
本資料も、鉄板の裏側に木質部が残存しており、その様子を確認することができます(写真2・3)。

本資料の特徴を列記すると、

1. 柄が長い。
2. 柄の頭が角張り、頂部は平である。
3. 厚さが、下方に行くほど厚くなる。
4. 下方まで鉄板で覆われている。

などを上げることができます。

小野山節氏は昭和41年に「日本発見の初期の馬具」(『考古学雑誌』第52巻第1号　日本考古学会)を発表し、木芯鉄板張輪鐙を古式と新式の2種に分類しています。挿図のうち(右)の新開1号墳のものが古式であり、(左)の長持山古墳のものが新式になります。


挿図　木芯鉄板張輪鐙　(左)長持山古墳出土　(右)新開1号墳出土(1/4)

新春特別企画「干支の午」
平成26年1月3日(金)～2月23日(日)
観覧料 一般100円　高校生以下・70歳以上の方無料
※30名以上の団体は2割引

この古式と新式の特徴を記せば、

(古式)

1. 柄が太く短い。
2. 柄の頭が丸い。
3. 厚さは、上から下まで同じ。
4. 前後の面は、柄と輪の接合部だけに鉄板をあてる。

(新式)

1. 柄が細長い。
2. 柄の頭が角ばる。
3. 厚さは、下方に向かうほど厚くなる。
4. 幅は、下方に向かうほど狭くなる。
5. 全体を鉄板で覆う例が多い。

となります。

ここで、先に紹介した椀貸山2号墳例と小野山氏による分類を比較すると、椀貸山2号墳例は小野山氏による新式の特徴を備えていることがわかります。また、本墳からはこの他の馬具として、轡・鉄地金銅鞍金具・鉄地金銅杏葉(ぎょうよう)が認められることからも、後出的要素を持っていることを補強しています。

日本における乗馬の風習は、4世紀後葉に北部九州において受け入れられ、5世紀初頭には近畿地方、5世紀後葉には東海～関東地方に波及したものと考えられています。

椀貸山2号墳出土の馬具は、越前において最も古い様相を持つタイプですが、それでも先に述べたように、本墳の年代が6世紀前葉に位置付けられることから、越前における乗馬の風習は現在のところ、東海～関東地方にやや遅れて6世紀初頭の頃からと考えるのが穏当と思われます。　(水村伸行)

館蔵資料紹介

ロバート・ブラウトン氏旧蔵写真（186点）

［撮影時期］　昭和23年（1948）6～7月頃

平成13年(2001)に、米国在住のロバート・ブラウトン氏から寄贈された写真群です。すべてモノクロの写真です。ブラウトン氏からは、昭和23年に占領軍の一員として福井に駐在した際に、入手または撮影した写真との説明を受けています。

これらの写真を内容から以下のように分けてみました。

A群：福井地震関連の写真

昭和23年6月28日に発生した福井地震に関する写真です。時間の経過にしたがって、さらに3群に分けられます。

Ⅰ群：地震発生直後の状況写真（5点）

地震直後に発生した火災が撮影されています。当日夜から翌朝まで火災がつづきました。

Ⅱ群：福井地震の被害状況の写真（59点）

地震の被害状況が撮影されています。福井の中心市街地のほか、水田や橋などの写真が含まれます。

Ⅲ群：福井地震直後の救援状況の写真（34点）

救援活動、福井地震の救援本部が置かれた福井城跡、家屋の片づけなどが撮影されています。

Ⅳ群：福井地震後の復興状況の写真（32点）

救援活動、福井地震の救援本部が置かれた福井城跡、家屋の片づけなどが撮影されています。

B群：占領軍の軍人の写真など人物の写真（23点）

ハイランド中佐ほか、占領軍（米軍）の軍人のほか、日本人も撮影されています。

C群：織物工場関係の写真（7点）

織物工場の内部や従業員などが撮影されています。

これらの写真のうち、今回は、A群・福井地震関連の写真について見ていきます。これまでも、福井地震とその復興に関連する記録写真は数多く公開されています。主要なものと公開されている写真の点数を以下に挙げます。なお、①～⑥にはそれぞれ、重複する写真も含まれます。

①「福井市広報広聴課写真帳」

画像データが福井市立郷土歴史博物館の公式ホームページ（http://www.history.museum.city.fukui.fukui.jp/）上で公開されており、350点を超える記録写真を閲覧することができます。

②『福井烈震史』（福井市、昭和53年）60点

③『福井震災誌』（福井新聞社事業局、昭和24年）49点

④『福井震災誌』（名古屋鉄道局、昭和25年）86点

⑤『よみがえる福井震災』（現代史料出版、平成9年）93点

⑥『写真特集 福井空襲・福井震災』（当館、平成13年）65点（米国立公文書館蔵写真を掲載）

A群の写真と、上記に掲載された写真群を比較しました。その結果、A群の写真には、建物内部の写真が13点あり、他と比べて多いことがわかりました。ほかの写真群では、地震後の建物内部の写真はあまり見られません。ただ、『よみがえる福井震災』の72ページに掲載された写真には、「崩壊した大和デパートの内部」の3点があり、これらはともに「GHQレポートⅡ」（昭和24年）から引用された写真です。同書の章立てからは、報告書に建築物への被害報告と記録写真が含まれていることがわかります。震災時に福井に駐在していた米国軍人であるブラウトン氏が、震災被害の写真撮影・収集に携わった可能性もあります。GHQ報告書とA群の写真の照合を行うことで、本資料群の震災記録写真における位置づけを明らかにできると考えています。

（瓜生由起）

館蔵資料紹介

橘家伝来太鼓胴

［法　　量］ 大豆柄　径25.0×高14.4(cm)
茄子柄　径25.0×高14.2(cm)

本資料は、能楽で用いられる楽器の一つである太鼓の胴の部分で、戦国期北庄の有力商人だった橘屋の子孫、橘家に伝来したものです。太鼓胴は2点あり、大豆と茄子の木から作られたという言い伝えから、それぞれ「大豆柄」「茄子柄」と名付けられています。大豆柄は金箔打、茄子柄は金摺箔です。

橘家文書にはこれらの太鼓胴に関連する古文書として、太鼓方観世流4代目宗家・観世国広による太鼓伝書11点と相伝状1点が伝わっています。太鼓伝書の年代は弘治3～天正6年(1557～1578)におよび、宛名は田辺三郎五郎(天正6年は三郎左衛門尉)、また、相伝状は天正6年4月のもので、宛名は田辺三郎左衛門尉です。このころ、橘家は橘屋三郎左衛門あるいは三郎五郎を名乗り、苗字は田辺を称していました。当時の当主は17代龍鳧(りょうふ)(1539～1614)であり、彼が観世国広から太鼓の相伝を受けたと考えられます。多数の太鼓伝書を通じて、長期にわたる段階的な相伝の様子をうかがうことができます。また本資料も、内側の墨書銘にある「藤九郎」が龍鳧の幼名と伝わることから、観世国広が龍鳧へ贈ったものと推定されます。

近世前期に成立した『近代四座役者目録』には、素人芸者として越前の「橘屋」が紹介されており、観世国広から太鼓を習っていたことが記されています。また『朝倉始末記』によれば、永禄11年(1568)5月、足利義昭が一乗谷を訪れた際に催された能の「役者」に、太鼓方として「田辺三郎」の名があり、これらはともに龍鳧のことと考えられます。彼は織田信長や柴田勝家ら戦国大名から特権を認められた、越前でもトップクラスの有力商人でしたが、一方で大名主催の能で太鼓方をつとめるほどの太鼓の実力を備えており、文化的な面でも卓越した存在だったといえるでしょう。

さて、江戸時代には、これらの太鼓胴や太鼓伝書のことは由緒ある橘家の家系を主張する根拠の一つになっていき、次のような興味深い古文書も残っています。これは、寛政10年(1798)12月、橘家24代宗賢が福井藩からの通達に対して返答したものです。

今般、江戸の観世座から橘家に伝来している太鼓胴を再び返してほしいとの申し出があったことについて、内々にお話があり、承知しました。まず、先方が太鼓胴を懇望しているのはもっともなことだと存じます。しかし、私の代に譲り受けた品であればいかようにもお望みに任せますが、先代の龍鳧がこの太鼓胴を貰い受け、それ以来七、八代の間、秘蔵してきたものです。ただいま私の代に至り再びお譲りすることは、先代は勿論、後代の者に対しても申し訳のないことと存じますので、速やかに了承することもできません。ただし、先代・後代の者へ申し訳さえ立つ道理があれば、いかようにも取り計らう心底です。先方へこのことを急ぎお伝えくださいますようお頼みします。

太鼓胴を返してほしいという観世家の申し出を簡単には了承できないと断りながらも、「先代・後代の者へ申し訳さえ立つ道理があれば、いかようにも取り計らう心底」だと述べている点は、橘家の商人としてのしたたかさを感じさせます。結果的に、このとき太鼓胴が観世家へ返却されることはなく、平成2年(1990)に当館へ寄贈されるまで、橘家の所蔵品として伝来することになりました。

(久角健二)

大豆柄太鼓胴

茄子柄太鼓胴

研究ノート

愛染寺所蔵 薬師如来坐像

－神明神社ゆかりのほとけ－

［法量］(cm)

像高	73.9	髪際高	64.0		
面長	14.8	面幅	14.2	面奥	17.7
頂～顎	24.4	耳張	18.0		
肩張	38.5	胸奥	18.5		
肘張	43.9	腹奥	22.9		
膝高左	11.4	膝張	58.9	膝奥左	41.3

越前では明治期の神仏分離を乗り越え、社殿内に仏像を伝える神社も多く見られます。いっぽう、社格の高い神社ほど神仏分離は徹底されたようで、寺院等に移された仏像も知られます。福井市国山町愛染寺に伝来する薬師如来坐像（以下本像）も明治期の分離により神社を出たとされる仏像です。以下、像およびその来歴について紹介します。

一、薬師如来坐像の概要

まず本像の概要について調査ノートより紹介します。

像高73.9cm。

〈形状〉肉髻（にくけい）、地髪螺髪（らほつ）彫出。半眼閉口。鼻孔浅く窪ませる。耳朶（じだ）環状貫く。三道彫出する。胸・腹の括れ各1条。袈裟（けさ）、僧祇支、裳を着す。袈裟は左前膊（ぜんぱく）に掛け、左肩を覆い、右肩にわずかにかけ、右腋下をとおり腹前で折り返してまわし、左肩に掛ける。右手は屈臂（くつび）し掌を前に向け、三・四指を軽く捻じ五指を上方に向け伸ばす（施無畏印（せむいいん））。左手は屈臂し、前膊を膝上に置き、掌を上に向け第二・五指を軽く捻じ、第三・四指を曲げ薬壺を持つ。右足を上に結跏趺坐する。典型的な偏袒右肩（へんたんうけん）の如来形像である。

〈構造〉一木割矧（いちぼくわりはぎ）造、内刳（ぐ）りあり。彫眼。頭体幹部一材。耳後ろで頭頂部から背面を前後に割り矧ぎ内部刳り抜き後、割首とする。木芯体部背面に込める。右肩以下一材。左肩から腰部にかけ一材。膝横一材を矧ぐ。右膝矧ぎ目に三角小材二材を挟む。左肩・体部材（腹部）矧ぎ目に一材挟む。左前膊に掛る衣部蓋状に一材。右手・持物含む左手各別材。

〈保存状態〉下半身、特に地付付近を中心に虫損著しく、スポンジ状になる。背面右下部ネズミ等による破損穴。後補は、左肩から地付けに至る一材、両手先、右膝・左腹に挟む数片の小材。

〈彩色〉現状後補による古色（黒色）。造像当初の状態は不明。

〈付属物〉光背は輪頭光。台座は蓮華座。共に江戸時代の後補。

二、本像の特色

全体の感覚として非常に優雅でおっとりとした像容です。このような姿は仏師定朝によって完成された「定朝様」と呼ばれる仏像の様式で、天喜元年(1053)に作られた京都府平等院の阿弥陀如来坐像がよく知られていますが、都をはじめ、都の文化にあこがれる地方もふくめ全国的に広まり、平安時代後期の仏像様式の定番となりました。では、細かく見てゆきましょう。

肉髻が深鉢を伏せたように高く、また螺髪も1粒ずつが小さくかつ尖っています。面部の輪郭は満月のようで、ほおは丸く張ります。目は半眼で静かな趣を見せますが、いっぽう眼下の隆起を強めに彫刻したため定朝様仏の眠るような半眼に対し、しっかりとした印象を与えられます。鼻・口は小さく上品に作られています。肩は丸みを帯びた撫で肩で、胸部は豊かではありませんが、非常に張りがあります。腹部は正面から見るとスマートに収まっていますが、側面ではたっぷりと奥行きをみせています。衣紋は薄絹を纏(まと)ったように浅くやわらかに彫られており、その曲線はゆるやかで自然に流れ、無理な強調はありません。また、背面の表現について、平安後期から見られる背面衣紋や後頭部の螺髪が省略されず、しっかりと作り込まれています。なお、左肩から地付けに至る材について、衣紋の稜線がやや尖っていることや袖の円弧を描く衣紋もたどたどしい感じであることから後補と考えられます。

以上のとおり、定朝様仏像の典型的特色をいかんなく発揮した平安時代後期12世紀の造像と考えられます。ただし、院政期の定朝様仏独特の「眠るような」抑揚を押さえた感覚に対し、本像の目元のはっきりとした彫りや衣紋の稜にはしっかりとした主張が感じられます。筆者はこれを同時期の工人・工房の差と考えましたが、あるいは鎌倉時代的感覚が表出しているとみることもできるでしょう。また、洗練された仕上がりから都で作られた可能性も考えられます。

三、本像の伝来について

本像が伝来する愛染寺は、国山神事で知られる福井市国山町八王子神社の隣に位置する真言宗智山派の寺です。江戸時代の寛文年間(1661～72)、秀政阿闍梨(あじゃり)が「福井中島」より現在地へ移した(『越前名蹟考』)、あるいは寛文10年(1670)に国山集落に住む久保五郎兵衛が、秀政阿闍梨を国山に招き、一寺を建立した(寺伝)ともいわれています。ただし八王子神社に隣接することから、本来併設していた神宮寺が退転し、寛文年間に再興したのが当寺とも考えられます。江戸時代の寺号は「泉明院」でしたが、明治時代に福井市牧野島の「愛染寺」の名跡を継ぎ、改名されました。因みに本尊は大日如来を中心とした江戸時代の金剛界五仏です。本像は明治時代の廃仏毀釈に際し、福井城下の神明神社(福井市宝永)より当寺に移され、以後護摩堂の中心に祀られています。

愛染寺以前に本像が伝来した神明神社は、中世都市・北庄発展の礎ともいうべき重要な古社として知られています。『神明社縁起』(神明神社文書、江戸時代)によると、平安時代の延長2年(924)に伊勢から北庄へ勧請さ

れたと記されていますが、伊勢神領として足羽御厨が成立したのが承安元年(1171)とされることから神明神社の創建はこれ以降とも考えられます。また『神明社縁起』は延長2年勧請時、大神宮使とともに下向した伊勢世義寺の良隆僧都が寺院(神宮寺)を建立したと伝え、神明神社は創建期より神仏習合が濃厚であったことがわかります。護摩堂に鋳造(金銅仏か)の如来像が祀られたようですが、この像の手印から、阿弥陀・釈迦の二尊を兼ねた特別な像とされ、これにより二尊寺と称したことが記されています。二尊寺は寿福院とも称し、別当寺として神仏分離まで神明神社との関係を保ちました。

本像が神明神社にどのように伝来し、いずれの堂宇に祀られていたか詳細は不明です。『神明社縁起』には牛頭(ごず)天皇(王)・市姫大明神の末社を建立しましたが、両社とも本地仏が「薬師如来」であると記されていることから、あるいは本像がいずれかの本地仏であった可能性も考えられます。ただし本像は、末社の本地仏像としてはやや大型です。また、文政13年(1830)の寿福院『由緒書』(神明神社文書)によると、所蔵仏像の項目に「一　本尊薬師如来　行基作」と記され、像の尊格が本像と一致することが注目されます。「行基作」との記述は、江戸時代後半時点で現存する他像に比べ古様なことを指す、もしくは古像であるという伝承を持っていたことを示す言葉とも見なせるでしょう。

四、まとめ

先述のとおり、『神明社縁起』にみえるエピソードから神明神社の創建には都の朝廷(皇室?)との関わりが想定されます。また、神社と神宮寺が同時に創建されたことを主張している点も重要です。実際の神社創建が承安元年(1171)以降とすると、様式から考えられる本像の造像時期が神社(神宮寺を含む)の創建期と非常に近いことが注目されます。『由緒書』を援用し、憶測を重ねれば、本像は神宮寺(寿福院)創建に関連して作られた仏像であり、神社創建に中央(都の朝廷)が強く関わった結果、仏像も都の好みを反映して造像された(あるいは都で作り、送られた)と考えられます。また、本像は奥行きの浅い膝部や衣紋の省略等、神像(神殿安置本地仏)的要素を持たない本格的な仏像として作られていることから神殿内の本地仏として祀られたものではなく、仏堂(神宮寺)のような開放的な場所に安置したとも考えられます。愛染寺には神明神社に関わるとされる江戸時代の仏像がこのほかにも伝わっており、文献資料と併せて再検討したいと考えています。

本像は定朝様仏像の美しさを余すところなく表現された見ごたえのある、美術的に高い評価を得るべき像ですが、これに限らず神仏習合文化、特に越前における伊勢信仰の広まりを考える上で重要な歴史資料としての側面を併せ持つ、貴重な文化財として注目される像といえるでしょう。

本文の作成および本像の特別公開に関し、愛染寺住職森川喜成師には多大なるご協力をいただきました。また、写真は福井市立郷土歴史博物館学芸員　藤川明宏氏よりご提供いただき、『由緒書』について福井県文書館柳沢芙美子氏より貴重な情報をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

(河村健史)

博物館日誌（平成25年3月～9月）

3月

●4日(月)～8日(金)
施設メンテナンスのため休館
●6日(水)
国立歴史民俗博物館来館(資料調査)
●9日(土)～4月18日(木)
写真展「サクラ、さくら。―絵はがきに見る桜の名所―」
(エントランスギャラリー)
●9日(土)
常設展示一部更新(歴史ゾーン)
●14日(木)
北名古屋市歴史民俗資料館来館(資料貸出)
●21日(木)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料調査)

4月

●1日(月)
常設展示一部更新(オープン収蔵庫)
●16日(火)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料調査)
京都外国語大学国際文化資料館来館(資料調査)
●21日(日)～6月2日(日)
写真展「福井の鉄道-昭和30年～40年代の福井の鉄路-」
(エントランスギャラリー)
●26日(金)～5月26日(日)
特別公開「橋本左内書状―書状から見える幕末の
福井と日本―」(オープン収蔵庫)
●27日(土)～6月2日(日)
企画展「写真が語るだるま屋百貨店―新発見資料で
よみがえる、夢と憧れの百貨店―」(特別展示室)
●30日(火)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料調査)

5月

●16日(木)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料調査)
●19日(日)
特別講演「安政の大獄と春嶽・左内、そして小楠」
(講師:大阪大学大学院名誉教授 猪飼隆明氏)
●23日(木)・24日(金)
北信越博物館協議会大会(長野県長野市)
●25日(土)
ふくい歴博講座「百貨店・だるま屋の時代」(研修室)
●28日(火)
福井県立こども歴史文化館来館(資料貸出)

6月

●3日(月)～12日(水)
施設メンテナンスのため休館
●13日(木)～7月9日(火)
写真展「福井震災」(エントランスギャラリー)
●14日(金)～30日(日)
特別公開「姉川合戦図屏風」(特別展示室)
●14日(金)
北名古屋市歴史民俗資料館来館(資料貸出)
●19日(水)
国立歴史民俗博物館来館(資料貸出)
福井大学来館(館内見学等)
●26日(水)
射水市新湊博物館来館(資料貸出)
●29日(土)～7月28日(日)
特別公開「《重要文化財》泰澄及び二行者坐像」(オープン収蔵庫)

7月

●11日(木)～9月1日(日)
写真展「「ふくい祭り」の60年」(エントランスギャラリー)
●19日(金)～9月1日(日)
特別展「ふくいの面とまつり」(特別展示室)
●24日(水)
福井市立郷土歴史博物館来館(資料貸出)
●25日(木)
福井県博物館協議会総会
●26日(金)
みくに龍翔館来館(資料調査)
福井県立若狭歴史民俗資料館(資料調査)
●27日(土)
ふくい歴博講座「ふくいの面とまつり」(研修室)

8月

●1日(木)～6日(火)
博物館実習(8名)
●3日(土)～9月1日(日)
特別公開「愛染寺所蔵木造薬師如来坐像」(オープン収蔵庫)
●4日(日)
ふくいキッズミュージアム「張子の面を作ろう！」
●7日(水)
南越前町教育委員会来館(資料調査)
●9日(金)
福井県社会福祉協議会来館(資料貸出)
●10日(土)
ふくいキッズミュージアム「段ボールロボットを作ろう！」
●11日(日)
ライブinミュージアム「獅子舞(篠座里神楽)」
●16日(金)～9月1日(日)
速報公開「福井空襲写真アルバム -日米に残された写真記録-」
(エントランスギャラリー)
●18日(日)
体験会「面をつけてみよう！」
●22日(木)
石川近代文学館・金沢能楽美術館来館(館内見学)
●29日(木)
重要文化財公開承認施設会議(於文化庁)
長浜市曳山博物館来館(資料調査)
●31日(土)
大阪市立大学来館(館内見学)

9月

●1日(日)
戦国史研究会来館(資料調査)
●5日(木)～10月15日(火)
写真展「ふるさとの情景　かやぶき屋根」
(エントランスギャラリー)
●9日(月)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料貸出)
●28日(土)
ふくい歴博講座「福井城下の商家・橘家と由緒書」(研修室)

[編集・発行]
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮2-19-15　TEL.0776-22-4675㈹
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.47 平成25年11月15日発行